

パネル

にした。同時に、そのように一方に力点を置くことに対して疑問を示した。

この四つの提題を受けて、コメンテータの森哲郎は、まず小坂に対して、「絶対無の自覚」の本来の意味は「逆対応」ではなく、むしろ自己が絶対無そのものであるという点にあるという主張に対する説明を求めた。浅見に対しては、西田の神理解が結局のところ「哲学者の神」であったという理解に対する説明を求めた。井上に対しては、臨済・白隠系統の禅には「超越」への志向がないのかどうかという質問を提出した。最後に高坂には東アジアの諸宗教との対比で西田の宗教観の特徴を明らかにすることを求めた。またフロアーからは、「体用相即」の問題や「絶対無」と「逆対応」との関係の問題などをめぐって質問が出された。

本パネルが果たした役割は、西田幾多郎の宗教理解の特質を、禅仏教やキリスト教、その他の東アジアの宗教との関わりといった多様な観点から明らかにした点にあると考える。さらにその特質をとりわけて「内在的超越」という概念で言い表しうることを、その点でキェルケゴールの思想との近さが存在することを明らかにしえた点なども、その成果に挙げることができるであろう。

近角常観とその時代

代表者・司会 岩田文昭
コメンテータ 島蘭 進

近代真宗の体験主義

—— 近角常観とその信徒たちの信仰 ——

碧海 寿 広

近代の真宗とは何であつたか。この問いに答えるためには、知識人の思想や専門家による教理学にばかり注目しては不十分であり、真宗の教えが個々人においていかに「生きられた」か、という実態を説明することが不可欠である。だが従来の研究は、真宗大谷派の近代的改革者である清澤満之や、戦後の「同朋会運動」に連なる偉人たちの生涯に関心を寄せる傾向が強く、そこに収まらない「生きられた」真宗の拡がりを見ていく意欲には乏しかった。例外として、「妙好人」に関する研究が庶民的な真宗受容の諸相を明らかにしてきたが、近世期と大差ない「妙好人」の性格ゆえに、近代性を問うには不足があった。

近角常観（一八七〇—一九四一）とその信徒たちによる宗教実践の意義を再考することは、この研究史上の欠損を補う上で非常に有益である。常観は近代の仏教者の中でも頭抜けた体験主義者であり、理屈や教学ではなく、各々の人間が自己の体験

を通して信仰を獲得することを尊んだ。尊ぶばかりではなく、自分が実際にどのような宗教体験をしたのかを、「信仰告白」(体験談)として意識的に語り、また自己のもとに集う信徒たちにもそれを語らせた。その最大の成果が、常観が主催していた『求道』誌における「告白」欄であり、この欄には常観の信徒たちによる赤裸々な信仰体験談が数多く掲載されている。

「告白」欄に体験談を寄せた信徒には、学生が最も多く、これは常観の影響力が青年知識人に対して大きかった、という通説を裏書する。女学生も複数名。次いで多いのが主婦と真宗僧侶で、後者には大谷派のみならず本願寺派の者もいた。加えて、医師、自営業者、商家の奉公人、会社員、郵便局員、公務員、機関車運転手、工場勤務者、農夫、政治家から軍人まで、常観のもとに集った信徒の職種は多岐に渡る。生家が代々の真宗門徒である場合が目立つが、クリスチャンから改宗した人物などもいる。また、同時代の宗教運動として著名な精神主義や無我愛等に関与しながら、常観のもとへと至った者も散見される。

こうした様々な来歴をもつ信徒たちが、自己の身に訪れた「人生問題」、例えば病氣や家庭不和や身内との死別、あるいは世界の不可解さに対する疑念や生きることそのものへの実存的な不安を語り、またその「問題」が信仰を得ることにより「解決」されたことを語る。「解決」とは、例えば病に関していえば、それが医療的な意味で「治る」ことがまず何より求められた。しかしそうした「現世利益」的「解決」にとどまらず、医療によっても信仰によっても決して「治らない」病に苦

しむなか、その病苦を「如来様からの恩寵」と肯定的に解釈し、「問題」を「問題」としないという「解決法」もまたありえた。このような複層的な信仰受容のもとに、近代における真宗信徒たちの体験的な「教え」理解はあったのである。

常観の信徒たちは、この様に自己の苦難と獲信の体験について反省し、それを語ることを通して、信仰を確立し一人の真宗者としての自我を確立していった。この自我確立の過程にはしかし、必ずといってよいほど、他者の信仰体験に対する共感が伴った。すなわち自己に先立って苦難と獲信の道程を経た者たちの体験を、自分の身に起った／起りうる体験として感じとり、そうした同調の感覚の中で自己の信仰に新たな意味を与えていくというプロセスである。信仰とは、あくまでも「私」が得るものでありながら、しかし既に他の誰かがそれを得ていたからこそ、そこに真実性を認めることができるものなのだ。

常観をひとつの核として、様々な職種や来歴をもつ信徒たちが互いの信仰体験に意味を付与しあう。この相互参照しあう信仰ネットワークの運動に、常観が近代において再構築した真宗仏教の独創性はあった。